

立岡東遺跡の調査

—宅地造成工事に先立つ遺跡確認調査—

1993年10月

太子町教育委員会

例 言

1. 本書は、兵庫県揖保郡太子町立岡字小畑130番-1における宅地造成工事に先立ち実施した遺跡確認調査の概要報告である。
2. 調査は、兵庫県揖保郡太子町立岡字小畑130番-1において平成5年9月6日から9月8日にかけて実施したものである。
3. 調査は、太子町教育委員会が主体となり、同社会教育課三村修次、海野浩幸が担当した。
4. 調査・整理作業に当たっては、太子町シルバー人材センター、玉田敏彦、岩村千穂、小山真紀各氏の協力を得た。
5. 本書の執筆・編集は、三村修次、海野浩幸が担当した。

本文目次

例言

調査に至る経過	2
調査の概要	2
検出遺構	3
出土遺物	4
まとめ	4

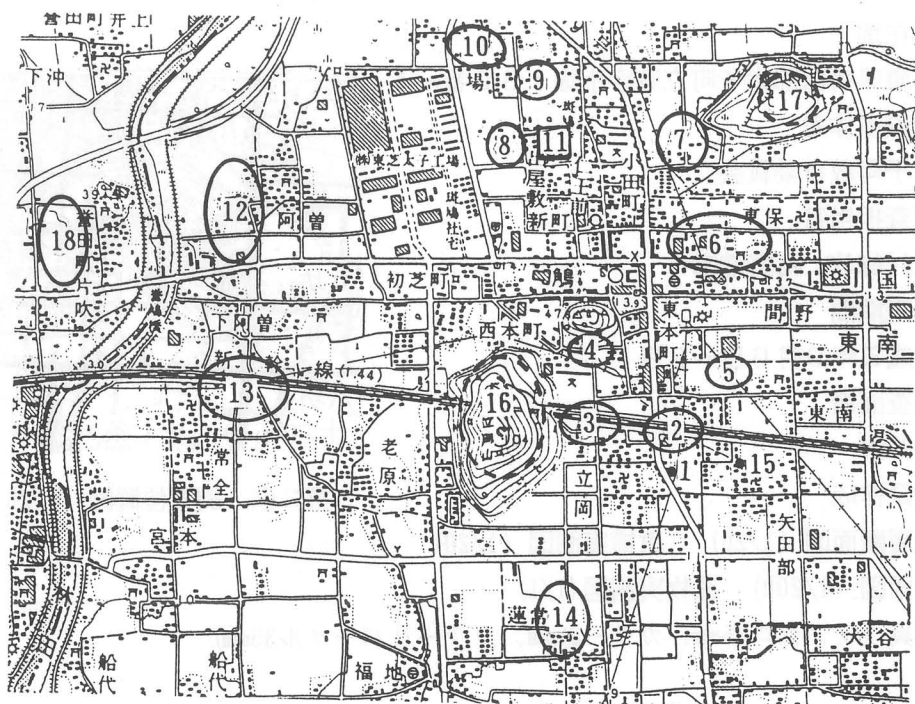
挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図	1
第2図 調査位置図	2
第3図 トレンチ配置図	2
第4図 第2トレンチ遺構実測図	3
第5図 第2トレンチ掘立柱建物跡実測図	3
第6図 遺物実測図	5

図版目次

写真1 上. 調査地全景
下. 発掘風景

写真2 上. 第1トレンチ
下. 第2トレンチ掘立柱建物跡



第1図 周辺主要遺跡分布図

国土地理院 1/25,000 龍野・網干

- | | | |
|-----------|----------|-------------|
| 1 調査地 | 7 助久遺跡 | 13 常全遺跡 |
| 2 立岡東遺跡 | 8 斑鳩寺西遺跡 | 14 蓮常寺北遺跡 |
| 3 立岡遺跡 | 9 斑鳩寺北遺跡 | 15 鶴荘矢田部勝示石 |
| 4 太子山南麓遺跡 | 10 馬場遺跡 | 16 立岡山古墳群 |
| 5 東南遺跡 | 11 斑鳩寺 | 17 東保山古墳群 |
| 6 鶴遺跡 | 12 阿曾遺跡 | 18 片吹遺跡 |

立岡東遺跡の調査

―宅地造成工事に先立つ遺跡確認調査―

1. 所在地

兵庫県揖保郡太子町立岡字小畑130番-1

2. 調査主体者

太子町教育委員会

3. 調査担当者

三村修次、海野浩幸

4. 調査期間

平成5年9月6日～8日

5. 調査面積

133 m²

6. 記録作成

土層断面図 (1/20) ・ 遺構実測図 (1/20)

平面図 (1/200) ・ 遺物実測図 (1/1)

写真 (モノクロ35mm、カラー35mm、カラーリバーサル35mm)



第2図 調査位置図 (1/25,000)

7. 調査に至る経過

立岡東遺跡は、標高104.1mを測る立岡山の東部に所在し、標高は、10～12m である。

周辺には、山陽新幹線建設時に発掘調査された立岡遺跡をはじめ、太子山南麓遺跡、立岡山古墳群の存在が知られている。また、立岡地区は中世荘園の一条院領弘山荘に属し、揖保郡条里上では八坊、九坊の十七条、十八条に属していた。

今回、立岡字小畑130 番-1において宅地造成工事が行なわれることになり、同地は立岡東遺跡の南方に位置し、遺物の散布も見られる事から、同遺跡の南限を確認する意味からも確認調査を実施することとした。調査地は標高11.1m 前後の水田である。

8. 調査の概要

確認調査は、上下水道の埋設される道路部分を中心にトレンチを設定し、遺構が確認された場合は随時拡張するものとした。調査終了時には、トレンチ5箇所 の調査となった。

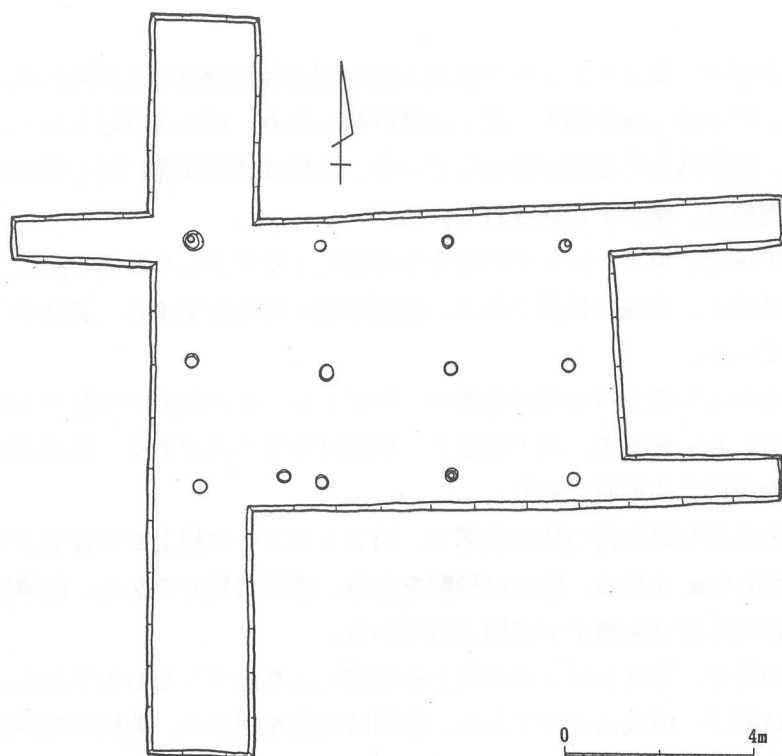
各トレンチとも、約20cmの耕土、2～4 cmの黄色客土の下で、暗黄褐色砂質土あるいは暗褐灰色砂質土の地山となっている。



第3図 トレンチ設定図

9 検出遺構

第2トレンチにおいて掘立柱建物跡1棟分が検出されただけで、他のトレンチからは遺構は検出されなかった。

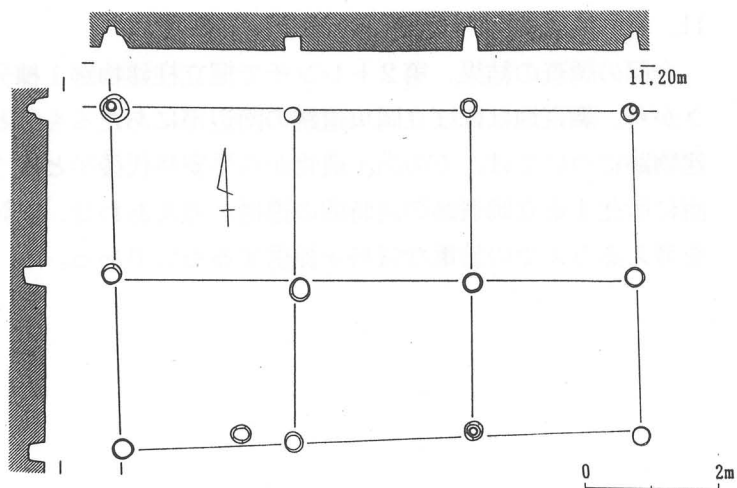


第4図 第2トレンチ 遺構図

掘立柱建物跡は、南北2間、東西3間の総柱で、南北柱間2.30～2.50m、東西柱間2.30～2.70mを測る。

建物の周辺部及び他のトレンチでの遺構が検出されなかったため、その性格については不明である。

北西隅柱穴からの出土建物から、平安時代後半の建物跡と考えられる。



第5図 第2トレンチ掘立柱建物跡 実測図

10 出土遺物

第2トレンチから第5トレンチで古墳時代から平安時代にかけての土師器（坏・甕）、須恵器（坏・碗・甕）、近世陶磁器片が若干出土した。遺構に伴う遺物は、第2トレンチで検出された、柱穴より出土した土師器（甕）のみである。ほとんどが摩滅した細片ばかりで、実測図化出来た物は6点であった。

1は土師器の甕で、第2トレンチで検出された掘立柱建物跡の北西隅の柱穴より出土したものである。口径30,6cmを測る。胎土は微砂粒を含み、焼成は良好である。色調は鈍い黄橙色を呈し、胴部外面には煤が付着している。調整は外面頸部に刷毛目の後横ナデ、口縁部外面及び内面は、横ナデが施されている。

2は土師器の坏で、第2トレンチの耕土から客土より出土したものである。口径14,9cmを測る。胎土は密で、焼成は普通である。色調は鈍い橙色を呈する。調整は内外面とも横ナデが施されている。

3は土師器の糸切り底を持つ坏の底部で、第2トレンチの耕土から客土より出土したものである。底径4,4cmを測る。胎土は密で、焼成はやや不良である。色調は明黄褐色を呈する。調整は摩滅のため不明である。

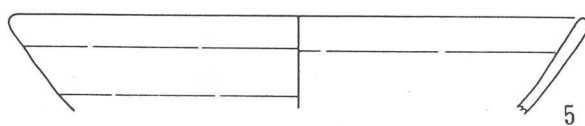
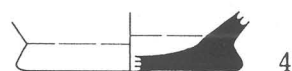
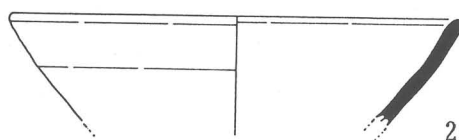
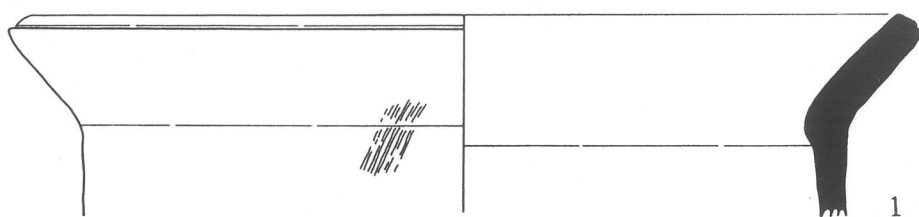
4は土師器の糸切り底を持つ坏の底部で、第3トレンチの耕土から客土より出土したものである。底径7,6cmを測る。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。色調は灰黄褐色を呈する。調整は内外面とも横ナデが施されている。

5は須恵器の碗で、第2トレンチの耕土から客土より出土したものである。口径19,4cmを測る。胎土は密で、焼成は良好である。色調は灰色を呈する。調整は内外面とも横ナデが施されている。

6は須恵器の糸切り底を持つ坏の底部で、底径5,8cmを測る。胎土は微砂粒を含み、焼成は普通である。色調は灰白色を呈する。調整は内外面とも横ナデが施されている。

11. まとめ

今回の調査の結果、第2トレンチで掘立柱建物跡1棟分が検出されたのみで遺構の稀薄さから、調査地はほぼ立岡東遺跡の南辺部にあたるものと考えられる。ただ、検出された建物跡については、その出土遺物から平安時代後半と言う以外不明であるが、調査地の北西に所在する立岡遺跡の同時期の遺構と考えあわせ、立岡東遺跡の性格や弘山荘との関連を考えるうえでの貴重な資料を提供するものである。



第6図 遺物実測図



調査地全景（南から）



発掘風景



第1トレンチ（南から）



第2トレンチ 掘立柱建物跡（西から）

